

# 都市化地域に残存する元農業用ため池保全の課題： 奈良市学園前の蒼池を事例として

鶴田 格\*・濱 朝子\*\*

\*近畿大学農学部環境管理学科

\*\*郷土史研究家，蒼池を美しくする会元代表

## Conservation of Abandoned Irrigation Ponds in Urbanized Areas: A Case Study of the Aoike-pond in Nara City, Japan

Tadasu TSURUTA\* and Asako HAMA\*\*

*\*Department of Environmental Management, Faculty of Agriculture, Kinki University*

*\*\*Independent Historian*

### Synopsis

Artificial ponds have been an integral part of irrigation facilities for paddy fields in Japan. However, with rapid industrialization in the post-war era, a lot of former irrigation ponds were abandoned, especially in urbanized areas, transforming themselves into dirty garbage dumps. From the 1980s, however, irrigation ponds remaining in urban areas started to be considered as important amenities which provide people with water-related recreation, leisure, and landscape. This paper tries to identify problems that confront a grass-roots activity to conserve an abandoned reservoir in an urban area. Aoike-pond in west Nara City was formerly utilized and maintained by a nearby rural community, but is now left unused and surrounded by houses and apartment buildings. The pond is now owned by the Nara municipal government, which regards it as a mere site for building public facilities. A group of neighborhood people launched a campaign to conserve the pond from 2003, besides organizing various events to promote the pond as a place to learn biodiversity as well as local history. The campaign encountered major obstacles, mainly in three different domains, namely, bureaucracy of municipal government, internal feud within the group, and lack of understanding among neighborhood communities. This case seems to represent a serious challenge of how to manage natural resources without any long-established community basis. One possible solution may be to create partnerships among existing organizations, including neighborhood associations, local government and the water user's association that formerly used the pond.

Keywords: irrigation pond, resource management, urban community, Nara

### 1. はじめに

農業用ため池は古来から日本のかんがい稲作のなかで重要な役割をはたしてきた。現在でもかんがい用水をため池のみにたよっている水田はすくなくない。大規模農業用水が普及している地域でも、依然としてため池が中間貯留池や補助水源としての役割をもっているところもある（内田

2003: 219)。このようにため池は現在でも水田稲作のかんがい方式の重要な一角をしめていると  
いってよい。しかし一般的な傾向としては、水田  
農業そのものの衰退と農村部の宅地化があいまっ  
て、おおくのかんがい用ため池が利用価値をうし  
ないつつある。とくに都市化地域に残存するため  
池は、うめたてられほかの用途に転用されるか、  
もしくは放置されてなかばゴミすて場のように

なっているところもすくなくない。

他方で、1980年代以降、こうしたため池を保全しつつ農業以外の用途に利用しようという機運がたかまってきた。たとえば都市部に残存する貴重な湿地ビオトープとして、レクリエーションの場として、環境教育の場として、地域住民の結節点として、さまざまな役割が期待されるようになったのである。多額の公的資金がつきこまれて親水空間のある都市公園として再生したケースもいくつかみられる。しかしながら、大部分のため池は放置されてうめたてられるのをまつのみである。たとえそれを保全したほうがよいと地元住民の大半がかんがえていたとしても、すでに農業用としては使用されなくなったため池については、以前は農村共同体によって管理されてきた池を今度はいったい誰が日常的に管理するのか、という解決困難な課題に直面せざるをえない。

そこで本論文では、現在でも都市部のなかにおおくのため池がのこされている奈良市の池（「蒼池（あおいけ）」）を事例として、都市化地域に残存した元農業用ため池の現状、その保全活動の実態、自治体の対応などを検討してみたい。これまで都市部に残存する現役の農業用ため池の保全活動についての研究（たとえば池上 1996；池上 2000）や、すでに都市公園化されたため池の事例研究（たとえば藤居 1999）はおこなわれてきたが、本研究の事例は、農業用としてつかわれなくなり長期間放置されてきたため池をあえて保存しようといううごきとして、興味ふかい事例を提供しているようにおもわれる。

本論文でとりあげる蒼池は奈良市西部の学園前地区にある。古来より水田をうるおしてきたため池だが、戦後宅地開発がすすみ、農業用ため池としての利用価値もなくなって、現在は水がぬかれたまま放置され草がおいしげる湿原となっている。

2003年に学園前の住民有志が「蒼池を美しくする会」を結成し、この歴史ある池を「水と緑を生かした自然型公園（ビオトープ）」としてよみがえらせることを目的に2008年ころまで活動してきた。

学園前周辺は、住民のほとんどが宅地開発後に移住してきたいわば「よそ者」のあつまりであり、典型的な都市化地域といってよい。そうしたコミュニティ的基盤のない都市社会で、ため池の保全をめぐるどのような動きがあったのか、それを本論文ではまず跡づけてみたい。そのうえで、完全に都市化された環境にとりのこされたため池を保全管理していく場合に直面する課題について、主として社会学的な見地から考察してみたい。

## 2. 予備的考察：都市化地域におけるため池の役割

日本のため池はもともと水田かんがいのためにつくられてきたものである。ため池をかんがいのためには利用しなくなった場合に、それは地域社会にとってどのような意義をもちうるのだろうか。ここでは、内田（2003）によりながら、とくに都市化地域におけるため池の現代的役割について考察してみたい。

内田（2003: 217-28）は、ため池のおもな機能をみつつ（ないしよつつ）に分類したうえで、それぞれの項目について詳細に検討している（表1参照）。

利水機能とは、ここでは稲、魚など食料生産にかかわる機能のことである。ため池はおそらく日本に稲作がつたわった当時からあるもっともふるいかんがい方式のひとつであり、河川かんがいの普及した現在でも水田稲作の欠かせない一部と

表1：現代におけるため池の機能

機能の種類		具体的役割
利水機能		農業用水供給，食料生産，養魚
環境保全機能	自然環境保全	地下水かん養，水質浄化，気候緩和，生態系保全
	防災	洪水調節，防火用水・生活用水
親水機能		水辺景観・アメニティ形成，レクリエーション空間形成，コミュニティ形成，文化遺産，学習・教育の場

出典：内田（2003: 218）の図11-1をもとに筆者作成。

なっている。ため池の魚や水生植物（ヒシ、ハス、ジュンサイなど）はまた、貴重な副食源として農村住民に利用されてきた。ため池では、農家の副業として観賞用の金魚や錦鯉、食用の鯉などを飼育することもできた。

次の環境保全機能は、ここでは自然環境保全と防災の機能に大別されている。自然環境保全の具体例として第一にあげられているのは、地下水のかん養ならびに水質浄化の機能である。ため池は池底から浸透する水によって周辺の地下水量および水質の保持に寄与している。また貯留する水に関しても、ため池は（池の規模や水収支など条件にもよるが）窒素除去などの水質浄化機能をもつ。「気候緩和」とは、ため池の水によって周辺の気温や湿度が安定化する機能である。ため池はまた水生の動植物や鳥類など野生生物の生息の場となっている。とくに都市化がすすむ地域においては、のこされた貴重な湿地バイオトープとして積極的に保全していこうとするうごきが各地でみられる。

防災機能としてまずあげられるのは、ため池の洪水調整機能である。ため池は大量の降雨時に雨水をため、水の流出を緩和する。とくにため池の集水域・排水域が都市化している地域では、行政がため池を改修して洪水調整機能をたかめる事例が各地でみられる。またため池の水は、非常時の防火用水や生活用水の供給源として活用することが可能である。

最後の親水機能は多岐にわたっている。水辺景観・アメニティ形成とは、ため池が作り出す水辺の景観が居住者にとって快適さ、心地よさをもたらすことをさしている。とくに都市化地域においては、残存するため池を積極的に公園整備などに利用することがはやくからおこなわれてきた。そうして整備されたため池の周辺は散策やジョギングの場となっているほか、水面を利用してボートや水上スポーツがおこなわれる場合もある（レクリエーション空間形成）。ため池はふるくから村のまつりなどがおこなわれた場であるが、現代においても池の管理、清掃、その他のイベントなどをとおして、とくに農業者と非農業者の交流の場を提供している。このコミュニティ形成の機能については、のちに蒼池の事例を検討するなかでもふれていきたい。最後に、ため池（とくに年代のふるいもの）はそれ自身が貴重な文化遺産であ

り、地域の自然環境や歴史をまなぶための学習・教育の場としても有用である。

以上みてきたように、ため池の本来の役割である「利水機能」をのぞけば、「環境保全機能」「親水機能」のいずれもとくに現代の都市部で重要な意義をもつものである。しかしその意義というのは、周辺の都市住民がため池のそうした価値を認識してこそ意味をもつものである。とりわけ「親水機能」に分類されている諸項目に関しては非常に主観的な性格のつよいものであって、そうしたことに価値をみいださない人間にとっては、ため池は何の意味ももたないともいえる。また内田（2003）の議論ではあまりふれられていないが、こうした諸機能がたがいに衝突する、という局面もありうる。ある機能を優先すれば別の機能が犠牲になる、ということも十分おこりうるからである。以下では、こうした機能論の限界を念頭におきつつ、具体的事例を検討したい。

次に、蒼池の保全活動の検討にはいる前に、その地理的・歴史的背景についてみてみたい。

### 3. 蒼池周辺の地理的・歴史的背景

#### (1) 蒼池の位置と概要

蒼池は奈良市の近鉄学園前駅の北東約500mに位置する、住宅地のなかにとりのこされたもと水田かんがい用のため池である（図1、図2参照）。池の標高は125～130mで、地形的には奈良盆地北西部の西ノ京丘陵に位置し、秋篠川支流の朝日川源流部の谷をせきとめてつくられている。奈良盆地のため池については、標高40～80m付近では平地に河川水を流入させたいわゆる「皿池」、標高100m付近では山間の谷をせきとめてつくったいわゆる「谷池」がおもに分布している（宮本1994:101）。蒼池は、典型的な谷池であるとかんがえられる。

蒼池の水はながらく近隣の中山町水利組合の管理下にある農業用水として使用されてきたが、都市化の進展とともにかんがい用水としての重要性がうすれ、1990年に池の水利権が奈良市に移転（後述）して以降は、市が池の管理をしている。その後たまっていた水をぬき、2003年にはその敷地の一部に五階だてのマンションが建設された。もともと12,300㎡の面積をもつ池<sup>1)</sup>であったが、マンション建設後もまだ堰堤をふくみ

10,000 m<sup>2</sup>ちかくのひろさが湿地・緑地としてのこされている。湧水および周囲からの生活排水や降雨時の流入水を水源とし、堰堤下の水門は解放されて常時水が放出されているものの、一定程度の水が常に池底にたまっている状態にある。湿地にはキショウブが群生しており、初夏にうつくしい花をさかせる。道に面している部分にはフェンスがはりめぐらされていて、いりぐちは施錠されている。年に2回、奈良市による草刈り作業が、池の内部の堰堤の法面部分を中心に実施されている。

## (2) 宅地開発以前の蒼池およびその周辺の歴史

奈良県耕地課が所蔵するため池台帳によれば、

蒼池は室町時代末期の1504年に築造された。ただそれ以前にも存在していたらしい証拠もみられる。たとえば8世紀の古絵図に基づいてかかれた鎌倉時代の絵図「大和国添下郡京北班田図（西大寺所蔵）」に蒼池らしきものがえがかれている。大規模な築堤がおこなわれたのが室町時代であったとしても、それ以前から小規模な複数の池がこの地に存在していた可能性はおおいにある。

蒼池はすくなくとも江戸期には、中山村の管理下にあったとおもわれる。中山村は明治時代にはいると平城村の一部となった。20世紀初頭に奈良県の委嘱によりおこなわれた大和川水系のため池調査によると、平城村の水田のすべてがため池かんがいに依存していたことがわかる（表2）。

図1 蒼池の位置



出典：国土地理院2万5千分の1地図『奈良』より作成（地図閲覧サービス「ウォッチず」を2012年11月に閲覧したものによる）。

以下の表2は当時の生駒郡に属するよつつの村の水田面積、ため池かんがい面積、ため池数などをあらわしたものである。これをみると丘陵部に位置する平城村、富雄村、矢田村には多数のため池があり、その大部分は名もないちいさな池であったことがわかる。それに対して平野部に位置し典型的な皿池地域である筒井村（現大和郡山市）では、少数の大規模な池のみが村の水田をうるおしていたことがわかる。

### (3) 学園前の宅地開発とため池の変貌

現在の学園前北部は、戦前まで赤松の疎林からなるしずかな里山であった（図2）。1914年（大正3年）4月に大阪電気軌道（現近鉄）の奈良―大阪上六間が開通する。1942（昭和17）年に現在の学園前駅南口に私立帝塚山中学校が移転し、それにあわせて同年、学園前駅が開設される。状況が一変したのは、戦後大規模な宅地開発がはじまってからである。蒼池が位置する学園前駅北住宅地は、近鉄によって1955～1962（昭和30～37）年にかけて開発された。それ以降わずか10年ほどのあいだに広大な面積の丘陵が開発され、現在の学園前住宅地のわくぐみがほぼできあがった（住井編 1975:11, 19, 36）。

そうしたなかでかつてかんがい用につかわれていたため池のいくつかは、宅地のなかにとりのこされていった。おもなものとして大淵池、菖蒲（あやめ）池、蛙股池などがある（図1、図2）。18世紀初頭に完成した大淵池とその周辺は奈良県により都市公園として整備された（1972年に事業着手、1984年完成、1997年より拡大整備）（住井編 1975: 29-30）。菖蒲池周辺には大阪電気軌道（現近鉄）が1926年に遊園地を開設し、2004年に閉園するまで大阪・奈良住民の娯楽施設として利用されてきた。ところが蒼池については、1960年代に奈良市がそこをとる道路を計画したが実

現せず、またおなじころにちかくの団地からの生活用水が直接蒼池に流入するようになり、1970年代なかばには悪臭源として池の処分が問題とされていた（住井編 1975:58）。

## 4. 「蒼池を美しくする会」の活動

### (1) 会の具体的活動とその成果

「蒼池を美しくする会」は、蒼池を都市の貴重なビオトープとして保全し、自然型公園にすることを目的として、池のちかくにすんでいた筆者（濱）を中心に2003年10月に設立された。設立のきっかけとなったのは、2002年から2003年にかけて蒼池の一部がうめたてられマンションが建設されたことである。

蒼池にはもともと、1960年代半ばに、池を横断する都市計画道路（平城学園前線）が計画されていた。1990年には、奈良市が将来の公共施設建設のためとして、池を管理していた中山町水利組合へ水利補償費など（14.6億円）をしはらって水利権をゆずりうけた。しかし市は財政難で具体的な用途をきめかねていた。1997年から99年にかけて、都市計画道路の用地取得のためとして、池の一部が分筆されて民有地と交換された。分筆された池内の土地が転売されたあと、上記マンションの建設用地となったのである<sup>2)</sup>。

「蒼池を美しくする会」は、こうしたうめたて・転用をふせいで、歴史ある蒼池を水と緑をいかしたビオトープとしてよみがえらせ、市民のいこいの場とすることを目的に活動してきた。具体的な活動としては、月に一回の池の掃除、季節ごとの観察会やイベント（竹やぐさを使った工作など）、会報の発行、地域の歴史に関するリーフレットの発行などを2004年から2007年まで精力的におこなってきた（表3）。会員のおおくは、蒼池（学園前）の近隣の住民や、自然観察会など

表2：20世紀初頭の生駒郡におけるため池かんがい

	全水田面積（町）	うちため池かんがいによるもの	ため池の数	うち名称のない小池の数	水田1町歩あたりのため池数
平城村	329	329 (100%)	354	336 (94.9%)	1.08
富雄村	479	479 (100%)	1,187	1,164 (98.1%)	2.48
矢田村	344	294 (85.5%)	368	357 (97%)	1.07
筒井村	199	199 (100%)	12	0 (0%)	0.06

出典：奈良県農会（1906: 4, 5, 19）。

イベントに参加して興味をもった人々であった。会員数は、結成してまもない2004年7月時点では約30名ほどであったが、その後2008年1月時点で70名ほどまでに増加していた<sup>3)</sup>。このうちおよそ半数は地元の学園朝日町もしくはその周辺、つまり蒼池まであるいてくることのできる範囲内にすむ人々であった。以下、具体的な活動内容についてくわしくみてみよう。

会が最初にとりくんだのは池の清掃である。表3には記載していないが、会は原則として毎月1回のペースで池のなかに放置されている空き缶などのゴミの除去をおこなってきた。清掃は、じつは会の設立以前（2002年末もしくは2003年初頭

ころ）から（阪神大震災がおこった1月17日にちなんで毎月17日に）地元住民有志によっておこなわれていたものである。当初は池がゴミすて場ようになっており、自転車やバイクなどがひきあげられたこともあるし、家庭ゴミがゴミ袋ごとそのまま捨てられていることもあった。「美しくする会」の設立後は、そうしたボランティアの清掃活動への参加を会をとおしてよびかけるようになった。一回の清掃にあつまる人数はおおくても5名でいどであったが、清掃をくりかえすことによりだんだんとゴミの投棄量もへっていき、とくに自然観察会などのイベントをおこなうようになってからは、その前日や当日の朝に会員が清掃

図2：20世紀初頭の蒼池周辺



出典：大日本帝国陸地測量部・二万分の一地図「西大寺」(明治41年〔1908年〕測量)より作成。

注：図示されている範囲は図1にほぼおなじ。

表3：蒼池を美しくする会の活動内容

西暦	主催のイベントなど	奈良市への働きかけなど
2004	3月：生物学者による講演会 4月：都市ビオトープに関する講演会 5月：奈良盆地の水利に関する講演会 5月：自然観察会 7月：自然観察会、生物標本づくり 9月：蒼池～あやめ池自然観察* 10月：地元公民館の文化祭で蒼池とあやめ池をテーマに展示	3月：大川市長に面談、蒼池の保全をもとめる要望書提出 3月：あやめ池遊園地跡地利用問題ならびに蒼池の保全に関して他団体と共同アピール* 6月：市企画課長と面会 7月：大川市長にあてた蒼池の保全に関する提言と要望を市企画課・管財課へ提出 8月：奈良市長選立候補予定者へ公開アンケート（未来なら市民ネットワークとして） 11月：蒼池・あやめ池などのため池保全の具体化をもとめる鍵田新市長あての要望書提出* 12月：鍵田市長に会いし、ため池保全を推進するようもとめる
2005	1月：自然観察会（生き物の冬越し）* 1月：「地域の歴史と自然を考える：どうする？あお池あやめ池」と題して大阪ガス学園前コミュニティースペースにて展示* 4月：地元公民館での展示と人形民話イベント* 4月：自然観察会 4月：アースデイ（ならコープ主催）に参加しパネル展示 5月：のこされたため池をめぐる地域歴史散策イベント* 5月：自然観察会（野鳥と植物の観察・ヨシを使った遊び等） 6月：「身近な水環境を調べよう」全国一斉調査の一環で蒼池・あやめ池・蛙股池などの水質調査* 9月：自然観察会 10月：キショウブの根による草木ぞめ実験 11月：「科学の祭典」（奈良教育大）で蒼池のパネル展示 11月：自然と歴史探訪イベント：磐船街道をゆく 12月：蒼池観察会と池の清掃	7月：奈良市長選挙にあたり市長候補をまねいて討論会（未来なら市民ネットワーク主催） 8月：藤原新市長と面会、蒼池保全の要望書提出* 9月：市長への要望書を全市会議員に配布
2006	1月：自然観察会 1月：「どうする？あお池あやめ池」第2回展示会（大阪ガス学園前コミュニティースペース） 2月：「きんき環境館タウンミーティング in 奈良」にてパネル展示（奈良市生涯学習センター） 4月：春の自然観察会 6月：学園朝日町の公民館でパネル展示と人形劇 6月：「身近な水環境の全国一斉調査」に参加* 7月：2006年度ならコープ環境保全活動助成をうける 8月：蒼池観察会 8月：池の内部と周辺住宅地の気温調査 9月：自然観察会（秋の虫） 10月：あやめ池連合自治会によるため池めぐりに協力 10月：池の清掃後、池内のクズをつかったカゴ編み講習会	2月：奈良市へ要望書提出 3月：藤原市長と面談、市民企画事業へ応募するようながされる 7月：市民企画事業に応募 10月：市民企画事業のプレゼンテーション 11月：市企画部より企画事業についての不採用結果説明 12月：市教育委員会、学校教育課へ次回自然観察会への協力依頼
2007	1月：自然観察会（冬の蒼池） 1月：「残そう！蒼池・あやめ池」展示会（大阪ガスコミュニティースペース） 2月：「秋篠の里 歴史散策ガイド」リーフレット完成 4月：親子でタケノコ掘り体験 4月：春のため池めぐり：奈良大から蒼池まで6kmを散策 4月：アースデー（ならコープ主催）に参加 5月：2006年度ならコープの環境保全活動助成をうけた団体として報告会に出席 6月：イベント「竹をつかって工作しよう」 6月：自然観察会（夏の生き物） 9月：地元公民館にて蒼池討論会 11月：蒼池の清掃と観察会 12月：蒼池の清掃と観察会	5月：奈良市役所で「蒼池展」を開催 6月：市の「まちづくり活動市民グループ」として認定される 7月：市民企画事業に応募 7月：事業応募をうけて地元自治会長へアンケート調査実施 11月：市民企画事業に採択決定 11月：市民参画課・公園緑地課・管財課と事業に関する協議

出典：「あお池だより」1号～12号より筆者作成。

注：\*は他の市民団体（あやめ池の自然と歴史をいかす会、あやめ池遊園地跡地利用問題対策委員会、秋篠川源流を愛し育てる会、未来なら市民ネットワークなど）との共催としておこなわれたイベントもしくは共同でおこなったこと。イベントに関しては文書などで共催（または後援）したと判明しているものみに記号をつけた。

をしたりして、ますますきれいになっていった。

表3にあるように、会はまた清掃以外のさまざまなイベントをおこなってきた。なかでも自然観察会や工作などの池の自然とふれあうイベントは、市民と専門家（大学講師や日本野鳥の会会員など）が協力して町のビオトープを保全していくために有効な活動として注目される。会では2003年から2008年にいたるまでにのべ20回ちかくにわたる自然観察会やそのほかのイベントを開催し、そこでは毎回子供をふくむ10～20名程度（おおい時は40名ていど）の人々が参加してきた。季節ごとに年3～4回おこなわれた自然観察会では、生き物の専門家をまねいてため池の草花、虫、鳥などを観察・同定してきた。それ以外にも蒼池とその周辺にある植物をつかった工作（クズをつかったカゴづくりや竹細工など）や、キシヨウブをつかった草木染め実験などの多様なイベントをおこなってきた。こうして誰もが気軽に参加できるイベントとしての工夫がされてきたのである。また画家である筆者（濱）の特技をいかして、池にはえているヨシを利用した「アシペン・スケッチ会」などのユニークなイベントも開催してきた。

自然観察会の成果のひとつは、蒼池で生息する生物の種類を特定したことである。次の表4は、蒼池を美しくする会の自然観察会で観察された生物の一覧表である（2004年7月4日に観察されたものを中心に、一部のちに追加）。このリストは、せまい空間のなかに非常に多様な生物種が存在していることをしめしており、住民にとっての蒼池の価値をはかるうえでも貴重な資料となっている。完全にまわりを宅地にかこまれたなかで、今でもゆたかな生物相にふれることができる空間であることをしめしているからである。ただ観察されたもののほとんどはありふれた生物種（とくに植物においては荒地などで繁茂する外来種がめだつ）で、奈良県や環境省から絶滅危惧種もしくは希少種に指定されているものはひとつもない。なおこのリストにはないが、アメリカザリガニの生息が確認されており、またタヌキやカメ（種は同定されていない）の死骸がみつかったこともある。

自然観察会とともに重要なイベントは、啓発活動の一環としての地元公民館、コミュニティスペース、市役所などでのパネル展示であろう。市

民生協ならコープが毎年開催するイベント「アースデー」など環境関係のイベントにも積極的に参加してきた。ため池やビオトープに関する講演会、勉強会なども何回かおこなっている。会員による池周辺の気温調査や水質調査もおこなわれている。2006年8月の4日間に会員2名で池の中と少し離れた住宅地とで毎時間気温を計測した結果、池の中のほうの気温がひくいという結果がでた。また手づくりのニュースレターとして「あお池だより」を3～4か月に一回発行し、会員などに配布して情報の共有をはかった。「あお池だより」は2004年8月の第1号から2007年11月の第12号まで発行された。

蒼池だけでなく、ひろく地域（秋篠地区）の歴史をまなぼうという趣旨で歴史の専門家も参加した歴史散策イベントも何回かおこなわれていることも注目に値する。2005年5月8日におこなわれた「地域歴史散策 ため池めぐり」イベントにおいては、約20名が参加し、蒼池を起点に中山町のやしゅか池や、押熊町のカゴ池、奥山谷池、山下池、二の池など宅地化がすすむなかでも現存するため池をめぐる約6キロのコースを散策した<sup>4)</sup>。同年11月には、学園前から長弓寺までの磐船（いわふね）街道（通称奈良街道）の史跡をめぐる歴史ツアーを実施し、約20名が参加した。また2007年には、「秋篠の里」と題した、地域の地理歴史についての情報をもりこんだリーフレットを作成し、出版した。

## (2) 蒼池を美しくする会をとりまく市民ネットワーク

蒼池を美しくする会の活動に関して社会的な観点から興味ふかいは、それが学園前周辺や奈良市のほかの市民団体（とくに環境保護にかかわる団体）と相互に協力しあいながら活動を展開してきた、ということである。表3では、美しくする会の活動のなかで他団体との共催としておこなったイベント、もしくは共同でおこなった活動の一部について星印をつけている。

なかでも特筆すべきは、400mほどしかはなれていない菖蒲池（上池・下池のふたつの池からなる）をめぐるたちあげられた市民団体との関係である。菖蒲池の周囲には近鉄が「あやめ池遊園地」を運営していたが、2004年に閉鎖された。蒼池を美しくする会が活動をはじめた2003～



表4：蒼池で確認された生物（2004～2007年）

植物	草本類	イネ科	イヌムギ、エノコログサ、オニウシノケグサ**、カズノコグサ、カモジグサ、クサヨシ、コスカグサ**、ススキ、セイバンモロコシ**、チガヤ、トボシガラ、ヒメコバンソウ**、メリケンカルカヤ**、ヨシ	
		キク科	アメリカセンダングサ**、イブキヨモギ、オオオナモミ**、オナモミ、セイタカアワダチソウ**、セイヨウタンポポ**、ノゲシ、ハルジオン**、ヒメジョオン**、ヨモギ	
		マメ科	アレチヌスビトハギ**、カスマグサ、シロツメグサ、スズメノエンドウ、ナヨクサフジ**、ヌスビトハギ、ミヤコグサ、ヤハズエンドウ（カラスノエンドウ）	
		タデ科	イシミカワ、ギシギシ、スイバ、ナガバギシギシ**、ママコノシリヌグイ	
		アカバナ科	アレチマツヨイグサ**、オオマツヨイグサ**、コマツヨイグサ**	
		アヤメ科	キシヨウブ**、シャガ、ヒメヒオウギズイセン**	
		シソ科	オドリコソウ、トウバナ、ヒメオドリコソウ**	
		セリ科	オヤブジラミ、セリ、ヤブジラミ	
		ガマ科	ガマ、ヒメガマ	
		カヤツリグサ科	アゼナルコスゲ、ゴウソ	
		ゴマノハグサ科	オオイヌノフグリ**、タチイヌノフグリ**	
		ツユクサ科	ツユクサ、トキワツユクサ**	
		ナデシコ科	ウシハコベ、コハコベ	
		ムラサキ科	キュウリグサ、ハナイバナ	
		ヤマゴボウ科	ヨウシュヤマゴボウ**、ヤマゴボウ	
		アカネ科	ヤエムグラ	
		アブラナ科	タネツケバナ	
		イグサ科	イグサ	
		ウリ科	アレチウリ**	
		カタバミ科	カタバミ	
	ケシ科	ムラサキケマン		
	バラ科	ヘビイチゴ		
	フウロソウ科	アメリカカフウロ**		
	ベンケイソウ科	コモチマンネングサ		
	ユリ科	カンゾウ*		
	ラン科	ネジバナ		
	トクサ科	スギナ		
	ワラビ科	ワラビ		
	木本類	モクセイ科	トウネズミモチ、ネズミモチ、イボタノキ	
		ウルシ科	ヌルデ、ヤマウルシ	
		トウダイグサ科	アカメガシワ、ナンキンハゼ	
		バラ科	ノイバラ、ユキヤナギ	
		ヤナギ科	アカメヤナギ、タチヤナギ	
		ユキノシタ科	アジサイ、ウノハナ	
		カキノキ科	カキ	
		クスノキ科	クスノキ	
		センダン科	センダン	
		ニガキ科	ニワウルシ**	
		ニレ科	エノキ	
		ヒノキ科	カイヅカイブキ	
		マメ科	ニセアカシア**	
		つる植物	マメ科	クズ、フジ
			アサ科	カナムグラ
	スイカズラ科		スイカズラ	
	ツツラフジ科		アオツツラフジ	
鳥綱	ブドウ科	ヤブガラシ、ノブドウ		
	スズメ目	ウグイス、エナガ、オオヨシキリ、キビタキ、シジュウカラ、ジョウビタキ、スズメ、セキレイ、ツバメ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ムクドリ、メジロ		
		コウノトリ目	アオサギ	
		ペリカン目	カワウ	
		ハト目	キジバト	
	哺乳綱	コウモリ目	コウモリ*	
		昆虫綱	チョウ目	カラスアゲハ、クロアゲハ、ゴマダラチョウ、ジャノメチョウ、ベニシジミ、ムラサキシジミ、ヤマトシジミ
			バッタ目	エンマコオロギ、オンブバッタ、クビキリギス、ショウリヨウバッタ
			トンボ目	コシアキトンボ、シオカラトンボ、チョウトンボ、ハグロトンボ、ヤゴ類*
			コウチュウ目	アオハナムグリ、カミキリモドキ*、コクワガタ
カメムシ目			アカシマサシガメ、ツマグロコバイ、ミズムシ*、ブチヒゲ（ヒメ）ヘリカメムシ、マツアワフキ	
ハチ目			アシナガバチ、ドバチ*	
カマキリ目			オオカマキリ	
アミメカゲロウ目		クサカゲロウ		
軟甲綱		ワラジムシ目	オカダンゴムシ、ワラジムシ	
ヤスデ綱	オビヤスデ目	キシヤスデ、タンバアカヤスデ		
クモ綱	クモ目	コガネグモ、ジョロウグモ		
腹足綱	有肺目	クチベニマイマイ、ヒメモノアラガイ		
唇脚綱	オオムカデ目	トビズムカデ		

出典：「蒼池を美しくする会」の資料をもとに筆者作成。  
 注：\*科名、属名もしくは通称で、種の特定がされていないもの。  
 \*\* 明治期以降に日本に帰化した外来種とされているもの。

2004年ころは、このあやめ池遊園地の跡地利用問題が浮上した年でもあった。おなじ都市計画道路（平城学園前線）が蒼池と菖蒲池（下池）をとおり予定になっていることもあり、また距離がちかいため生物の生息空間としても両池を一体として保全するのが当然であろうとのかんがえから、蒼池を美しくする会と菖蒲池関連の二つの団体、すなわち地元住民でつくる「あやめ池遊園地跡地利用問題対策委員会」と「あやめ池の自然と歴史をいかす会」は、当初から協力関係にあった。表3にあるように、2004年3月には、この三つの団体で奈良市および近鉄への共同アピールをおこなっている。また2004年11月には「いかす会」と「美しくする会」で菖蒲池・蒼池一体の保全を求める要望書などを奈良市に提出している。

「あやめ池の自然と歴史をいかす会」の代表I氏は、蒼池を美しくする会の副代表もつとめていた人物で、また「あやめ池遊園地跡地利用問題対策委員会」の代表N氏も蒼池を美しくする会のメンバーとなった。表3にあるように、美しくする会は、蒼池と菖蒲池の両方を観察する会を開催したり（2004年9月）、公共スペースなどをかりておこなっていた展示会でも蒼池と菖蒲池の両者を取りあげるなどしてきた（2005年1月、2006年1月、2007年1月）<sup>5)</sup>。前述の2005年5月8日の「ため池めぐり・歴史散策イベント」も蒼池を美しくする会が主催で、あやめ池の自然と歴史をいかす会、未来なら市民ネットワーク（後述）との共催となっている。また「いかす会」は2007年2月2日に菖蒲池（下池）の南半分をうめたて市道を建設する計画について、市長に対して反対の署名を提出した<sup>6)</sup>。こうした署名活動にも「蒼池」の方のメンバーが関わっていた。

蒼池を美しくする会はまた、近隣にある既存の「秋篠川源流を愛し育てる会」とも密接な関係をもっていた。これは大淵池下流の秋篠川の土手に1998年ころから桜の植樹をする、という活動をおこなってきた団体である。それぞれの桜には「桜里親」をつくり、世話をしている。このほか月一回の川の清掃、燈火夜桜祭り（4月）、親子で川あそび大会（川の生物・水質しらべ）、桜里親のつどい、などを開催してきた<sup>7)</sup>。両方のグループには共通のメンバーがおり、おたがいの会合やイベントに関する情報が共有されていた。

2005年6月4日には、「蒼池を美しくする会」

および、あやめ池遊園地跡地利用問題対策委員会、あやめ池の自然と歴史をいかす会、秋篠川源流を愛し育てる会の4市民団体が合同で「身近な水環境を調べよう」全国一斉調査に従事している。これは国土交通省、河川環境管理財団が連携してもうけた全国水環境マップ実行委員会のよびかけに応じたものである。共同調査では、菖蒲池上池、秋篠川、朝日川、大淵池、蛙股池、蒼池などの7か所で気温、水温、CODなどを測定した<sup>8)</sup>。

並行してすすめられてきた活動としてもうひとつ興味ふかいは、環境問題（ゴミ問題、原発、森林保全、ため池保全など）に関心のある市民によって設立された「未来なら市民ネットワーク」の活動である。その共同代表をつとめていたのは、蒼池を美しくする会の代表をしていた筆者（濱）と、同会副代表のI氏らである。同ネットワークは、蒼池の会が活動をはじめた2003年に、奈良県知事選の候補者3名に対して県政のあるべき方向性（財政、公共工事、自然保護、教育、福祉など）についてアンケートをおこない、公表した。翌2004年8月には、同年おこなわれた奈良市長選に際し、3名の立候補者に対して公開アンケートをおこなった。アンケートの内容は、大半が市の環境政策にかかわるもので、なかでもあやめ池遊園地跡地、蒼池、ならびに学園前の南方に位置する赤膚山国有林の利用方法について質問していることが注目される。未来なら市民ネットワークは、2005年7月の市長選でも同様のアンケートを候補者に対しておこない、市民が投票する際の判断材料として（エコねっと奈良、奈良地球村などのほかの環境保護団体と協力して）インターネット上などで公開した<sup>9)</sup>。その時にはアンケートだけでなく、実際に2人の市長候補をまねいて、政策を論議してもらう市政勉強会をも主催した<sup>10)</sup>。

こうして蒼池を美しくする会のメンバーたちは、ため池の問題のみならず、もっとひろい見地から奈良市政へも積極的に関与しようとしてきたのである。次に、蒼池を美しくする会が、会として奈良市にどうかかわってきたかを検討したい。

### (3) 市政へのはたらきかけ

すでに断片的にふれてきたように、蒼池を美しくする会は蒼池の管理者たる奈良市に対して積極

的に蒼池の保存をはたらきかけてきた。表3にあるように、歴代の奈良市長とは何度も直接会見し、蒼池をうめたてることなく自然公園としてのこすよう再三にわたって要請してきた。

まず奈良市議会において当時の大川市長が「蒼池を売却したい」との意向を表明したという情報をえた会員たちは、2004年3月に市長に面会し、蒼池を（売却せずに）ビオトープとして再生するようもとめる要望書を提出した。さらに同年7月に大川市長にあてて提出した要望書では、蒼池をビオトープとして再生するとりくみを奈良市のまちづくり総合計画のなかで位置づけるよう要請したうえで、以下のような4項目の具体的提案をおこなっている<sup>11)</sup>。

- (1) 蒼池をはじめとするビオトープの再生に、奈良市が担当課もしくは担当係などを設置したうえでとりくむこと。
- (2) そのうえで（蒼池の防災公園としての整備を要望している）自治会代表と、蒼池を美しくする会、奈良市所管課との協議の場をもうけること。
- (3) 住民、専門家をふくめた蒼池再生にかかわる実行委員会を常設し、その意見をふまえて奈良市が事業化すること。
- (4) （蒼池だけでなく）一般にビオトープを促進する条例とマニュアルを策定し、全市的にビオトープのネットワークづくりをすすめること。

2004年11月には同年の選挙で当選したばかりの鍵田新市長に対して「蒼池を美しくする会」と「あやめ池の自然と歴史をいかす会」とが共同で、あやめ池・蒼池一体の保全を求める要望書を提出する。前述のように後者のグループの代表は前者の副代表でもあった。その内容は菖蒲池上池・下池と400メートルしかはなれていない蒼池を一体として保全するため、市民や専門家が参加する協議会を設置して具体的に保全にとりくむよう要請するものであった<sup>12)</sup>。

その翌年、2005年8月に藤原昭市長に直接提出した要望書では、（前年に要望した）上記4項目は、1999年に施行された奈良市環境基本条例にもとづく環境基本計画に合致しているの、これにもとづいて蒼池の保全を実行にうつすように要請している<sup>13)</sup>。なおこのときには「あやめ池

遊園地跡地利用問題対策委員会」の代表とあやめ池地区自治連合会会長も市長に会見し、遊園地跡地に市民のいこいの場・環境学習の場として自然公園を整備し、また菖蒲池周辺の生物に関する調査をおこなうとともにその保護をはかるよう要望した。この時市長は、市内にあるため池などを保全する「緑のネットワーク」をつくるという方向で対応したい、と前向きな姿勢をみせた<sup>14)</sup>。蒼池を美しくする会は9月にはいると、上記要望書を全市会議員に配布した。

藤原市長時代の2006年に、「市民企画事業」というものがはじまった。これは市民から提案のあった企画のなかから市がえらんで事業化するものである。ここに応募するようながされた「蒼池を美しくする会」は、3年間で1,500万円の事業費をかけて蒼池をかこむフェンスの交換、草刈りなどの保全事業、水質改善事業、休憩所整備などをおこなうというプランを提出するが、採択されなかった<sup>15)</sup>。翌2007年、事業規模と予算をかなり縮小して（単年度100万円程度）ふたたび応募したところ、採択された。事業提案内容は、湿原保全のためあさい池（水辺）をつくる、ベンチを設置する、自然にしたしむ会を開催する、水質浄化をすすめる、池の歴史と自然がわかるような看板を設置するなどであった。しかし、この企画事業に採択されたことが、結果的に次にみるように会の分裂のきっかけをつくることとなった。

#### (4) 会の分裂

上記のように、「美しくする会」は市民企画事業に応募して待望の蒼池整備事業化（2008年度）にまでこぎつけた。会では事業化をうけて、奈良市、蒼池を美しくする会、それから地元鶴舞地区に属する16の自治会や老人会など地縁団体などの関係者が一同に会し、蒼池に関してはなしあう場としての「蒼池ビオトープ協議会（仮称）」の設立を構想しようとしていた。

しかし、このころから会のメンバー内で意見の対立がみられるようになってきた。意見が対立した点のひとつは、蒼池で5月ころうつくしい花をさかせるキショウブについてである。代表である筆者（濱）は外来種ではあるが景観的にうつくしい（また水質浄化の機能ももつ）キショウブをまもるべしという立場であったが<sup>16)</sup>、一部のメンバーは外来種は排除すべしとゆずらず、対立し

た。

それらの一部メンバーはまた、本格的なビオトープ型公園をつくらうとかがえている人々でもあった。かれらは当初予定の低額予算のプラン（年間100万円程度）を、億単位の費用がかかるような高額なプランに変更して奈良市に提示しようとした。そのこともあって代表（会長）の筆者（濱）と対立し、結局筆者（濱）は不透明なつづきによって除名されることになり（2008年3月）、筆者に同調するおおくの会員が脱会した。その結果、蒼池を美しくする会は外来種を排除し本格的な公園をつくることを構想する一部メンバーによって占有された形になった。こうして事実上「蒼池を美しくする会」は消滅してしまったにもかかわらず、残留したメンバーはこの団体名をしばらく使用しつづけたのち、「蒼池・ビオトープ市民の会」と名称を変更して現在にいたっている。採用された市民企画事業は、市が事業の条件として提示した「周辺住民の理解」がえられなかったため、結局実現することはなかった。

その後筆者（濱）は「歴史と自然をいつくしむ会」という別の団体をつくり、奈良の歴史と自然に関する勉強会などをかさねている。2010年9月には、仲川げん・奈良市長に対して「蒼池の歴史解明についての要望書」と題する蒼池の調査と保全をもとめる文書を、「歴史と自然をいつくしむ会」ならびに「蒼池を美しくする会 有志」の名前のもとに提出した。「いつくしむ会」は2012年7月にも仲川市長へ同様の要望書を提出している。濱は現在に至るまで不定期に蒼池の観察会を開催している。

## 5. 結論：会の活動を通してみえてきたこと

ここまで、蒼池を美しくする会の活動と事実上解散にいたるまでの経緯をたどってきた。ここでもう一度内田の分類した「ため池の機能」にもどってかがえてみると、会の活動がとくに（内田のいう）「親水機能」に重点をおいていたことはあきらかである。水質浄化、気候緩和、生態系保全などの自然環境保全機能にももちろん注目し、ことあるごとに強調されていたが、活動のいちばんの原動力となってきたのは、歴史ある文化遺産を地元コミュニティの手でまもらなければならない、という信念であったようにおもわれる。

そのコミュニティ形成のために、池の清掃や自然観察会や展示会などの地道な活動を熱心におこなってきたのである。

しかしそうしたとりくみは、次のみつつの壁に直面することになった。ひとつは行政の壁である。すでにふれたように会は奈良市に対して蒼池の保全に関して再三はたらきかけてきたが、その反応はつねににぶいものであった。市長への直訴は別として、主として相談の対象としていたのは、（それが市の財産であることから）管財課、公園緑地課、都市計画課などであった。しかし管財課は市の財産の事務的な管理をするセクションであるし、公園緑地課は正式な「公園」として位置づけられたところを管理する部署であり、都市計画課は道路を中心とするインフラ整備のしごとを中心としているため、「行政と市民が協議しつづ管理するビオトープ」のような構想を正面からとりあげてくれるような部署は存在しなかったといえる。そもそも蒼池が（開発すべき対象ではあっても）自然保護の対象としてはとらえられていなかったふしがある。

ふたつ目は、会の内部にできた壁である。前述のように結果として会は、市民企画事業化がきまったとたんに、多額の資金を投入した本格的な公園づくりを指向する若干名の人々に占有されてしまうこととなった。またかれらは一部会員の反対にもかかわらずキショウブの駆除をおこなおうとした。キショウブ駆除というのは、内田の分類でいえば「自然環境保全」機能をすべてにおいて優先する、ということである。しかし「親水」という立場からみると、たとえ外来種であってもみたくにうつくしいものは保全しよう、というかんがえもなりたつ。結果的に会を占有した人々は、「立派な公園としての整備」と「生態系保全」というふたつのことを優先するあまり、時間をかけて地元の理解をひろげていく（コミュニティ形成、愛着形成）という方向性をとぎってしまったといえる。

みつつ目の壁は、地元住民の壁である。蒼池を美しくする会のメンバーにはおおくの地元の住民がふくまれていたとはいえ、地域ぜんたいの人口からすると少数派にすぎない。地元住民を代表する組織として自治会が存在するが、残念ながら一部の自治会の役員は、会の運営に協力的ではなかった。また阪神淡路大震災後の1997年に、自

治会長の連名で蒼池を埋め立て（一時避難場所としての）防災公園にしてほしいと奈良市に要望した経緯があり、その当時のプランにこだわる人もいた。一般に自治会も住民も地域の環境問題には関心をしめさないし、また池の清掃など面倒なことはやりたがらない。また奈良市側は（地域のことに関しては）「自治会の意見を尊重する」という建前である。

大阪府羽曳野市の都市化地域のため池新構想を検討した池上（1996）は、農家世帯を中心とした「市民コモンズ」としてのため池の管理体制をかんがえている。しかし蒼池の保全活動に地元農家は一切かかわっていないので、旧来の農村コミュニティにたよることはそもそもできない。しかし何らかの意味での地元住民のつながり（コミュニティ）がなければ、住民の自主的な管理を構想することは不可能だろう。住民の自治的管理というのは、一足とびに形成されるものではない。たとえ迂遠なようにみえても、「美しくする会」がかつて提案したような、行政、地元自治会やほかの市民団体がため池管理という共通の課題についてはなしあう場としての「協議会」を、蒼池の所有者である市がイニシアティブをとって設定するところからはじめるしかないであろう。

蒼池の事例を検討してわかったことは、あたりまえのことだが、池はつかわなければゴミすて場と化すし、（どんな方法であれ）つかえばそれなりにきれいになっていく、ということである。その意味では、いまのように池を単に放置しておくのではなく、住民が自由な発想で何かイベントなどをおこなうときにはいつでも池を開放する（あるいはそうした利用を積極的に推進する）、というような姿勢も必要であろう。コミュニティ形成は、蒼池を美しくする会がこころみたような地道な草の根の活動を長年つづけることによってしか決して達成されえないからである。

## 付記

2012年より、筆者らとの協力のもとに、近畿大学農学部環境管理学科の複数の研究室による蒼池の生態系や水質についての合同学術調査がすすめられている。今後、こうした調査結果にもとづき、蒼池の将来的な利用のしかたについて提言がなされる予定である。

## 参考文献

- 池上甲一. 1996. 「市民コモンズとしての溜池の意味論：水から見る都市・農村の環境観」『年報村落社会研究』32, pp.31-67.
- 池上甲一. 2000. 「都市地域のため池整備と住民参加」『農業と経済』, pp.125-134.
- 内田和子. 2003. 『日本のため池：防災と環境保全』海青社.
- 住井恒雄編. 1975. 『学園前のあゆみ』学園前ショッピングセンター開設15周年記念事業誌発行委員会.
- 奈良県農会. 1906. 『奈良県溜池整理調査書』
- 日本農学会編. 2008. 『シリーズ21世紀の農学：外来生物のリスク管理と有効利用』養賢堂.
- 藤居由香. 1999. 「居住地域における水環境に関する研究：奈良県のため池を事例として」『新潟青陵女子短期大学研究報告』29, pp.53-61.
- 宮本 誠. 1994. 『奈良盆地の水土史』農山漁村文化協会.

## 注

- 1) 奈良県ため池台帳による。
- 2) 奈良新聞記事（2003年9月23日）および朝日新聞記事（2004年6月21日）による。
- 3) 奈良新聞記事（2004年7月24日）および「蒼池を美しくする会・臨時総会議事録（2008年1月19日）」による。
- 4) 奈良新聞（2005年5月11日）記事。
- 5) 2005年1月のものに関しては、蒼池を美しくする会が主催、あやめ池の自然と歴史をいかす会が共催となっている。奈良新聞、2005年1月10日記事。
- 6) 朝日新聞記事（2007年2月3日）。
- 7) 「あお池だより」第3号（2005年）記事による。
- 8) 奈良日日新聞（2005年5月30日）など記事。
- 9) 未来なら市民ネットワーク「2004年奈良市長選立候補予定者への公開アンケート（2004年8月10日）」など資料による。
- 10) 朝日新聞2005年7月16日記事。
- 11) 蒼池を美しくする会『環境基本計画にある「ため池と多様な動植物の保全」の具体的推

進を求める要望』(2005年8月31日, 藤原昭・奈良市長に提出)。

- 12) 奈良新聞 2004年11月17日記事, 奈良日日新聞 2004年11月18日記事。
- 13) 同上要望書。
- 14) 奈良日日新聞 2005年9月5日記事。
- 15) 市民企画事業応募書類による。
- 16) キショウブの窒素・リン酸などの浄化能力に関しては, 日本農学会編(2008)を参照。